

## 開催趣旨

麻生 恵（東京農業大学、研究企画担当）

例年の大会では、基調講演（記念講演）、それにシンポジウム（パネルディスカッション）ということで開催しているが、今年度の大会は、例年とは多少趣向を変えて、特別セッション（オーガナイズド・セッション）を開催することになった。

第37回大会は、「東京」の東洋大学で開催ということなので、「東京に因んだ企画を」をいうことで検討を進めてきた。そんな中で昨年、2016年に東京にオリンピックを招致することが決まり、東京都はこれから世界を相手に招致活動を展開することになった。そこで、オリンピック招致をテーマに取り上げようということになった。

オリンピックというものは、単なるスポーツの祭典（アスリートの祭典）ではなくて、実は、まちづくりであったり、都市整備であったり、また国民を上げて楽しむレジャー・レクリエーションでもあり、レクリエーションとは切っても切れない関係にある。

そんな中で、日本へのオリンピックの招致に関係されている嵯峨先生の方から、「これからのオリンピックには、その開催がどのような社会的効果や新しい視座やビジョンを後世に残せるかといった、いわゆる『レガシー』（遺産）の内容が問われる、またオリンピック開催は一つのまちづくりであり、ハード面、ソフト面の両面にわたって都市を大きく変えられる可能性があり、そんな中で我々日本レジャー・レクリエーション学会が目指す『ゆとり』の創出や再生を考える大きな機会になるのではないか、また一方で東京都が『10年後の東京』という2016年オリンピック開催を視野に入れた戦略的な東京の再生プランを作成していて、これが大いに参考になる」とのご指摘を

いただいた。

そんな経緯から、「レジャー・レクリエーションの充実に寄与するオリンピック・レガシー」というテーマで、様々な分野の会員が集まる本学会の特徴を活かして異なる視点から議論し、学会として独自のレガシーを提案したり、あるいは学会が取り組むべきテーマ、さらには活性化に向けた今後の活動の方向性について議論しようということになった。

具体的な進め方であるが、先ず最初に筑波大学の嵯峨寿先生から「オリンピックの招致とレガシー」というテーマでお話をいただき、それに続いて、私の方から「10年後の東京」の概要をご説明しながら、その中に「ゆとり」の創出や再生がどのような形で出てくるのか、といった点についてご紹介する。そして、休憩をとったのち、オーガナイズド・セッションということで、異なる立場の4人の先生からプレゼンテーションをいただくことにする。

一人目が東京農業大学の栗田和弥先生で「空間論・環境論の立場から」、二人目が江戸川大学の土屋薫先生で「ツーリズム論の立場から」、三人目が余暇問題研究所の山崎律子先生より「レクリエーション・ムーブメントの立場から」、最後に上智大学の師岡文男先生より「スポーツ・フォー・オール」の立場から」というテーマでプレゼンテーションを行っていただく。

本日の議論で、おそらく明確な結論は出ないと思うが、今後の学会活動の重要なテーマとして位置づけ、学会の活性化につなげていきたいと考えている。